

## 平成 28 年度 第 1 回庄原市総合教育会議 議事録

1. 日 時 平成 29 年 1 月 23 日 (月) 午後 3 時 30 分開会

2. 場 所 庄原市役所本庁 5 階 第 2 委員会室

3. 出席者

### 【構成員】

木山耕三市長 牧原明人教育長 末信丈夫教育委員  
寺西玉実教育委員 中山智恵子教育委員 横山和明教育委員

### 【事務局】

寺元豊樹企画振興部長 片山祐子教育部長  
加藤武徳企画振興課長 山田明彦教育総務課長  
中重秋登教育指導課長 花田譲二生涯学習課長  
ほか担当職員 (2 名)

### 【議事進行】

木山耕三市長

4. 欠席者 なし

5. 傍聴人 なし

6. 開 会

7. 説明事項

#### (1) 庄原市立小中学校の適正規模及び適正配置に係る提言について

配付資料に基づき、これまでの経過及び提言の内容について事務局より説明を行った。

(横山教育委員)

このことについて教育長へ要望書が出されたと聞いている。要望書を見たわけではないが、新聞ではかなり厳しい意見が書かれていた。市長や議長のところにも提出があったと耳にしたが、どのような内容であったか聞かせてほしい。

(木山市長)

私のところへはまだ要望に来られていないが、教育長から話は聞いている。これから要望書も届くだろう。

(牧原教育長)

私のところへは、東城町の7区の自治振興区のうち6区の区長等が来られ、東城町の自治振興区の総意として、統廃合には反対との意見を述べられた。更には、川北地区でも自分達の地域から学校がなくなるのではないかと、要望書を提出しなければいけないではないかといった声があがっていたが、学校長が、子ども達にとってどういった形が最も良いのかを検討していかなければならないのではないかと住民に説明したと聞いている。

また、自治振興区の様々な会に参加する中で、小規模校を抱える自治振興区の区長からは、「学校をなくすのか」といった厳しいご意見もいただいている。

ただ、現に音楽の合奏や集団で行うスポーツなどが出来ていない状況もあり、子ども達にとってどのような教育を行っていくことが望ましいのかを考えながら、提言に基づき本市の方針を決めていかなければならない。

(木山市長)

提言の中では、地域コミュニティへの配慮に努めるという表現があるため、これを踏まえて話を進めていかなければならないのではないかと。

(牧原教育長)

提言の中では、「再編によって生まれる学校とその校区の地域住民との間に、新たな関係を創出するよう配慮に努める」という表現となっているため、少し意味合いが違うのではないかと思う。

(木山市長)

今日は提言を受けた後、最初の会議ということもあり、基本的な考え方を確認するということであると思うが、これから協議を進め方針を決めていかなければならない。

私の住んでいる地域も小学校がなくなり、隣の地域でも学校がなくなっている。学校がなくなることについての恐怖感はあると思うが、最終的には子ども達をどういった環境においてあげるかということが重要である。集団の中で教育を行っていくことによって子ども達の学力等が伸びるという面もあり、そうしたことも含めてどう理解していただくかということだと思う。

(末信教育委員)

私は帝釈中学校が廃校になるときに勤めていたが、最後の一年生が男子1名、女子1名の計2名だったため、授業をするにも難しい面があった。また、集団の中でコミュニケーション能力が育ちにくいということがあり、東城中学校へ行ってから苦労したのではないかと思う。そうした中で、教育を行っていくにはある程度の規模が必要であると感じた。

私が勤めていたときに、保育所・小学校・中学校・地域が一体となって、ふるさと祭りを行ったが、それが現在も続いていると聞いた。学校がなくなっても地域の中で子ども達を育てているのだと大変嬉しく思った。

学校の適正規模・適正配置については、メリット・デメリット等あると思うが、地域の理解を得ながら進めていかなければならない。

(横山教育委員)

4月から教育委員となったことで、学校訪問等をする機会が増えた。その中で、初めて複式学級の授業を見せてもらったが、一緒に授業を受ける子ども達にも学力差があり、非常に難しい面があるという印象を受けた。提言にもあるように、ある程度の規模の中で教育を受けることが、子ども達の成長にとって不可欠なのではないかと感じた。

(木山市長)

私も複式学級で学んでいたが、例えば小学3年生で4年生の授業が受けられるなど、今で言う飛び級のような形で授業を受けることが出来ていた。

(牧原教育長)

以前はそういった授業も認められていたが、今は認められていない。教員もそういった環境での授業展開は学んでいないため、経験を積んでいくほかないが、しばらくすれば転勤してしまうため、なかなかそこまでの指導力が身につかない。

(横山教育委員)

以前、小奴可小学校で模範授業を見させてもらったことがあり、その時はこうした環境なら複式でもと納得したのだが、それ以外の授業を見るとやはり複式ではと不安を感じてしまう。

(寺西教育委員)

学校がなくなるかもしれないという地域の方々の思いを考えると非常につらいが、子ども達のことをまず一番に考えなければならない。子ども達が数名で授業を

行う中では位置付けも決まってしまう、また、集団活動の面でも難しい部分がある。そのため、適正規模・適正配置といった考え方も必要なのではないかと思う。

ただ、一番望ましいのは、定住に関する予算をしっかりと組んでもらい、子どもを増やしていくことだと思うので、簡単ではないことは重々承知しているが、そういった取り組みにも更に力を注いでもらいたい。

(木山市長)

小学校の1学級あたり20人から30人というのは何か基準があるのか。

(牧原教育長)

国においては1学級あたり1・2年生が35人、3年生以上が40人というのが基準となっている。庄原市では、それほどの児童・生徒数は確保できないため、20人から30人が望ましいのではないかというのが検討委員会での意見である。

(寺西教育委員)

地域の方の意見の水面下には保護者の声がある。そこでは多くの子ども達の中で学ばせたいという声も多いが、そうした声がなかなか出せないという現状もあるのではないかと思う。

(横山教育委員)

人口動態で言えば、東城町は30年ほど前には1万6千人ほどの人口であったが、今では8千人程度となっている。しかし、中心部の人口はそれほど変わっておらず、要するに周辺部の人口が大幅に減少している。この背景には、規模の大きな学校に通わせたいと希望する保護者が、東城市街地に住居を移しているという実態もあるのではないかと思う。

(牧原教育長)

自由学区制という考え方もあり、検討会議でも意見は出たが、広大な市域を有する本市においては難しい面が多々あり、議論に上がらなかった。

先ほど意見があった地域の声と保護者の声に乖離があるということは理解しているが、そうした意見を集約することは難しいと感じている。

## (2)「しょうばら教育の日」の創設について

配付資料に基づき事務局より説明を行った。

(木山市長)

教育という幅が広く、小学校から中学校、中学校から高校へと続いていくわけであるが、その間、学校を超えた縦の繋がりが殆どないように思う。

また、一部には地元の高校に進学させる必要はないという声も聞く。教育も地域づくりの一環であるという考えのもと取り組みを進めていかなければならない。

(牧原教育長)

教育風土を醸成するため、合唱やスポーツ大会など、地域を巻き込んだ取り組みを発信しているが、まだまだ発信力が弱い部分があり、なかなか根付いていないように思う。

(横山教育委員)

東城町では、秋にお通りという一大イベントがあり、小・中・高校生それぞれの立場で関わっていきこうという風土がある。小学生は地域における伝統文化として学び、中学生は高校生と連携して地域ボランティアを行う、それを見た小学生達も同じように地域活動に参加していく。そうした連携をより密にしていけば、地元から進学する生徒の割合も増え、結果的に地元高校の存続に繋がっていくのではないかと。そうした中で、教育週間があれば、色々なことが組み込みやすくなると思う。

(木山市長)

地元の高校を選んでもらうにも、ある程度の教育水準がなければ難しい面がある。現在、高校の新たな魅力作りのための支援を行っているが、下支えとなる学力向上への取り組みは不可欠であると感じている。

(横山教育委員)

人口が減少する中で、当然に児童・生徒数も減少してくる。地元高校への進学という意識付けは早い段階からする必要があると思う。

(牧原教育長)

選ばれる学校となるためには、やはり努力をしていかなければならない。特色を出すことはもちろん重要であるが、卒業後の進路等も選択の要素として大きく影響するため、その部分の努力も不可欠である。

(末信教育委員)

以前、教育委員会の取り組みについて意見交換を行う機会があったが、その際にPTAの代表から「このような取り組みをしていたことを初めて知った」という感想があった。教育フォーラムやしょうばら教育の日を通じて、教育に関する取り組みを広く披露する、一緒に考えていくという機会を設けて欲しいと思う。

(木山市長)

庄原実業高校について感じたことで、学んだことを活かして、庄原で頑張っていこうと考えている生徒が多いように思う。他の学校についても、特色を出して、庄原で頑張っていこうと思ってもらえるような教育・意識付けをしてもらいたいと思っている。

また、県立広島大学については、多くの学生がおり、地域の宝であると実感しているが、学生を街に呼び入れてにぎわいを創っていくというようなアイデアが乏しいと感じている。学長からも、庄原で頑張りたいと思う人材を育てていきたいという声ももらっているため、小学校・中学校・高校・大学、それぞれが連携した教育を推進していきたいと考えている。

教育の日の創設については、市民の機運醸成も必要であることから、そうした準備も含めて進めていただきたい。

(寺西教育委員)

教育の日の創設が、色々な世代、立場の方が一緒に教育について考えることができる機会になれば、庄原市の教育風土を醸成する第一歩になると思う。

## 8. 閉 会